書き抜き読書ノート 2520	2023 年 5 月 25 日

齋藤孝著「読書力」岩波新書、岩波書店 2002 年 9 月 20 日刊を読む

自分をつくる読書のコツとは

Ⅰ　言葉を知る

１．（１）あまりにも当たり前なことかもしれないが、考えることは、言葉で行う行為だ。
（２）一人で考え事をしているときも、言葉で基本的には考えている。
（３）言葉の種類が少なければ、自然と思考は粗雑にならざるを得ない。
（４）考えるということを支えているのは、言葉の豊富さである。

２．（１）話し言葉の種類は限られている。
（２）日常を過ごすだけならそれほど難しい言葉は必要ない。
（３）しかし、その日常の話し言葉だけで思考しようとすれば、どうしても思考自体が単純になってしまう。
（４）表現する言葉が単純であれば、思考の内容も単純になっていってしまう。
（５）逆にいろいろな言葉を知っていることによって、感情や思考自体が複雑で緻密なものになっていく。
（６）これが書き言葉の効用である。
（７）書き言葉には、話し言葉にはないヴァリエーションがある。

３．（１）**言葉をたくさん知るためには、読書は最良の方法である。**
（２）なぜ読書をした方がよいのかという問いに対して、
（３）「言葉を多く知ることができるからだ」という答えは、シンプルなようだがまっとうな答えだ。

Ⅱ　自分の本棚を持つ喜び

１．（１）しばらく前に、「自分探し」という言葉が流行したが、私にとっては「**自分をつくる**」という表現の方がしっくりくる。

（２）外のどこかに自分を探しに行くというよりは、経験を蓄積し積み上げていくというイメージの方が、自己イメージに近い。

（３）もちろん、二つの表現の言わんとしていることには共通点もある。

（４）それは、**出会いが人をつくる**ということだ。

２．（１）**自己や自分というものは、自分ひとりでつくるものではない。**
　　他者との関係の中でつくられていくものだ。

（２）唯一絶対の自己というよりは、関係の網の目の中で、様々な側面が形づくられていく。小説や映画でヒットした『羊たちの沈黙』のモデルとなった捜査官が書いた『ＦＢＩ心理分析官』(ハヤカワ文庫)は、異常殺人者たちの素顔に迫った手記だが、そこでは、そのような殺人者たちには他者との関係が取れていない共通点があると書かれている。

（３）「**他者といい関係を築いていく**」ことができれば、そこまでの異常殺人を起こすことはないだろうと、著者のレスラーは言う。

３．（１）読書は、もちろん「**知性や情感を磨くもの**」でもあるが、同時に、「**複数の優れた他者を自分の中にすまわせること**」でもある。

（２）「**情報を手に入れること**」だけが、読書の主目的ではない。

４．（１）**生身の人間の価値観を自分の中に取り入れ、自分の幅を広げていく。**

（２）**凝り固まった狭い考えに閉じこもらずに、優れた人間の価値観を様々に受け入れる。**

（３）そうした作業を地道に続けることで、**社会常識から隔絶した孤立的な空想に陥ることを防ぐ**ことができる。

（４）もちろん本によっては、犯罪につながるような空想を喚起するようなものもある。

（５）その意味では、本に全く毒がないとは言い切れない。

（６）自殺の仕方や殺人の仕方まで書いた本が出ているくらいだ。

（７）しかし、ここで強調したい読書は、そのような種類の本のことではない。十分幅広い読書をしていれば、そのような本を絶対視することも少なくなる。

５．（１）その意味では、「**種類の違う複数の本を幅広く読み続けること**」が重要だ。

（２）「**本棚を見ればそのひとがわかる**」、と言われることがある。

（３）その人自身の考えを直接聞くよりも、「**読んできた本のラインナップを眺めさせてもらえれば、およその見当がつく**」。「**友達を見ればその人がわかる**」といったことと同じような意味だ。

6．（1）「**自分の本棚を持つ**」のは楽しい。

（2）「**自分の世界が広がっていく様子が手に取るようにわかる**」からだ。

（3）音楽に関しては、好きな音楽ＣＤが自分の棚に並んでいく喜びは、多くの若い人が知っている。

（4）しかし現在、自分の本棚を持っていない人も多い。

（5）ここで本棚としてイメージしているのは、横が１ｍほどで、高さが六段ほど入る本棚のことだ。

（6）一家四人であれば、少なくとも四つの大きな本棚が各人用にあってしかるべきだ。

7．（1）「**自分の今まで読んできた本が見渡せる**」というのは、非常な喜びだ。

（2）**過去の自分と現在の自分が、そこでは繋がり合っている。**

（3）「**自分の本棚**」には、「**自分が過ごしてきた読書の時間が詰め込まれている**」。

（4）「**優れた著者との出会い**」が、「**これまでの自分の人生が有意義であったこと**」を、自分に知らせてくれる。

8．（1）優れた著者の本を読んでいるときの自分は、自分でも肯定しやすい。

（2）自分を肯定する自己肯定感は、自分自身に向き合うときよりも、何か素晴らしいものに向かっているときに感じやすい。

（3）好きな音楽を聴いているときの自分を好きだというのも、自己肯定感の一つではある。

（4）しかし、読書の場合は、自分がより積極的にエネルギーをかけなければいけない行為だ。

（5）そうして出会えた人物との時間は、苦労して得たものだけに、自分でも充実感がある。

9．（1）本は単数よりも複数の方が威力が増す。

（2）私は高校生の頃、自分のベッドの枕元の棚に本が一冊ずつ増えていくのを見るのが好きだった。

（3）その頃は、まだ本棚に至る前の段階だった。ブックエンドに一冊ずつ挟んでいくのだ。当時は、本は読み切らなければいけないものと思っていたので、読み切った充実感が一冊一冊に詰め込まれていって、眺めているといとおしくなった。

10.（1）本来は過ぎ去って跡形もなく消え去っていってしまう砂のような時間が、しっかりと本という形でそこに凝縮されて残っている。

（2）その安定感がうれしかった。

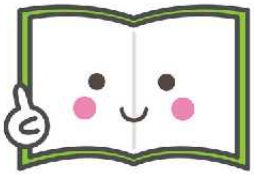
Ⅲ　繋がりながらずれていく読書

１．（１）本は、本の連鎖を生む。
（２）一冊読むと次に読みたくなる本が出てくる。
（３）それが読書のおもしろさだ。
（４）例えば高校時代に私は、夏目漱石の『三四郎』を読んだ。
（５）すると、三四郎に続いて、三部作と言われる『それから』と『門』を読みたくなった。主人公の名前は違っているのだが、どこか連続性が感じられる。

２．（１）小林秀雄はかつて、「**全集を読むこと**」を勧めていた。
（２）トルストイならトルストイの全集を読んでみると、いいものも悪いものもある。
（３）しかし、それらを全部含めて読んでみたときに、トルストイという人間の全体が自分の中に入ってくる。
（４）「**文は人なり**」というのはそういう意味だ、といったような意味の文章であった。

３．（１）「**同じ著者の本を何冊も読んでいる**」と、無駄も多いようにも思うが、実は「**その著者を深く自分の中に引き入れる良い方法**」となっている。
（２）顔をいろいろな角度から写真に撮ってみた方が、１つの角度よりは実際の顔のイメージに近づく。「**本の場合も、何冊かを読むことによって、著者の人格や考え方が染み込んでくる**」。
（３）そうなると、「**本を読むという行為**」は、「**恩師の話を聴く**」ようなイメージとなる。

４．（１）「**自分の尊敬する著者がいいと薦めている本は、読みたくなる**」ものだ。
（２）まったく縁もゆかりもない本を読むのはつらい。
（３）しかし、「**自分が好きな本の中に出てきた本は、すでに縁ができている**」。
（４）たとえば、好きになった坂口安吾が小林秀雄や太宰治について書いてあると、ついにその二人の本も読みたくなってくる。



５．（１）「**一人の著者がきっかけで、本の網の目がどんどん広がっていく**」。
（２）「**関心も微妙にずれて広がりを持っていく**」。
（３）これが「**世界観の形成に役立つ**」。
（４）一人の著者だけを偏愛しているのでは、世界観の形成には限界がある。
（５）「**うまくずらしながら増幅させていく**」のが、「**自分をつくる読書**」のコツだ。

P66 ～ 73

＜コメント＞

明治大学文学部教授、齋藤孝先生の「読書力」は、「辞書」「新聞」「読書」「図書館」に親しみ、「読解力」を身に着けるうえでも極めて有用。本書のこの「自分をつくる」読書のコツは、この後には「本は背表紙」をいつも見続けることが大事。いつでもさっと取り出して読めるよう「本は並べ方」が大事。「図書館はマップづくりの場所」読書をすることで自分の体験、「経験を確認する」「辛い経験を乗り越える」「人間劇場」「読書自体が体験となる読書」と続きます。是非、御一読ください。

2023 年 5 月 25 日(木)林明夫